

## 幼児に対する母親の上位水準名命名に関する語用論的分析

西山 修・片山 美香\*・滝口 圭子\*\*

### A Pragmatics Analysis on Mother's Superordinate Ostension, Labeling and Inclusion for Young Children

Osamu Nishiyama Mika Katayama & Keiko Takiguchi

The purpose of this study was to examine the role of mother's strategies for young children in interpreting novel word meaning by means of pragmatics approach. Mothers may influence children's interpretation through the input they provide about categories of different levels. The experiment was conducted in which mothers taught concepts to their 2 to 4-year-old children using pictures that varied in familiarity. The main results were as follows: (1) As the results of Callanan (1985), mothers used basic ostension more than superordinate ostension for the single objects. And mothers used superordinate ostension when they taught superordinate concepts for the group; (2) "Contextualized ostension" attended with pointing partly. Further, using this ostension occurred under influence of conceptual level and familiarity; (3) Implicit statements of inclusion, "demonstrative" and "collective" statements, occurred only when superordinate categories were being taught. The findings suggested that children must learn categories through mother's ostension, labeling and inclusion. Children were given extra information, explicitly and sometimes implicitly, that may help them to learn superordinate categories.

**Key Words:** superordinate concept, pragmatics, young children, mother

発達初期の子どもたちはいかにしてすばやく、しかも簡単に語彙を獲得していくのであろうか。この問に対して、子どもは事物と名称との関係を規定するある原理を使って言葉を素早く獲得しているという説(制約論)と、養育者と子どもとのかかわり方などに組み込まれた情報を重視する立場が対峙してきた(小林, 1995a)。本研究は、制約か、周囲の大人による獲得かといった二律背反ではなく、生得的な働きが子どもの語彙獲得をスムーズにする中で、大人の語彙獲得の果たす役割は一体どの部分か明らかにするために、幼児に対する母親の上位水準名命名について語用論的な分析を試みるものである。

---

\* 呉大学看護学部 \*\* 三重大学教育学部

子どもが語彙を獲得する速度は、正に驚きに値する。1歳半ば頃から6歳頃まで、実に1日約8語から10語という驚異的なペースですすむ (Carey, 1978)。驚異的なペースという表現は、単に語彙獲得量の多さに起因するものではない。この時期の子どもは限られた情報処理能力しかなく (e.g., Brown & DeLoache, 1978)、語彙の獲得は極めて困難な状況と考えられるからである。

我々がある事物に名称を与えられるときの最も基本的な方法は、事物を指し“あれはX (事物名) です”という指示定義 (ostensive definition) である。その際、Xという語は初めて耳にするものであり、その語から語意について考え出すことのできる仮説 (語意仮説) は、原理的には無限に存在する (いわゆる「Quineのガヴァーイ問題」)。それにもかかわらず、子どもは正しい意味を推測し、語彙を急速に獲得していくのである。

相互作用論的な立場からは、子どもは周囲の大人とやりとりする中で、語意に関して考える語意仮説を検証していくと考えることもできる。確かに日常よくみられる、母親が事物を指差して命名するというやり方は、語を定義する最も簡潔な方法のように思われる。このようなやり方で語意を明らかにしようとするれば、子どもは語と指差された事物との対応づけ (mapping) から語意について考える仮説を、相手の反応を手がかりに吟味し、是非を判断していくことになる。しかしながらこれは、幼児期のごく短い期間に、できるだけ多くの事物の名称を獲得するという観点からすれば非効率的である。直観的には簡潔な方法にみえる母親の指示-命名方略 (ostension) も、子どもにとっては曖昧かつ困難な状況なのである。

周知の通り、Markman (1989) は、子どもは語の持つ多様な意味の可能性を消去するために生得的な認知的制約 (cognitive constraint) を持っているとして主張した。つまり、語彙獲得は基本的には帰納的な仮説検証過程であるが、考慮すべき仮説の数を劇的に減らすことにより、子どもの驚くべき語彙獲得の速さを説明できると考えたのである。Markmanの提出した制約とは、対象全体仮説 (whole object assumption)、分類法仮説 (taxonomic assumption)、そして相互排他性仮説 (mutual exclusivity assumption) である。たしかにこれらの制約を想定することで、“語彙の爆発”と“帰納的仮説検証の困難さ”とのジレンマを解消することができる。この「制約」の考え方が提出されて以来、90年代の語彙獲得研究の関心は、もっぱら幼児の内的な語意解釈プロセスへと傾斜したと言えよう。

しかしその一方で、以下のような制約の考え方への疑義も提出されている。先の制約のうち相互排他性仮説は、子どもが既に獲得してしまっている語と、これから新しく獲得する語との間の意味関係を調節する制約として、「1つの事物はただ1つの名称を持ち、語の指示範囲 (referent) は重なり合うことはない」といった原理を持つというものである (Markman & Wachtel, 1988)。Nelson (1988) は、語彙獲得がある程度進んできてからでもなお相互排他性があると、同一の対象をさまざまな概念水準で名付ける上位カテゴリーや下位カテゴリーの言葉の獲得が阻害されてしまうと述べている。また、相互排他性を仮定した場合、幼児に極めて頻繁に見られる同一の対象に対する幼児語 (e.g., ワンワン) が成人語 (e.g., 犬) に置き換わって獲得されるという現象もうまく説

明することができない (小林, 1995b)。確かに相互排他性が悉皆的に働いた場合、概念の階層や別名のようなものが全く習得できなくなってしまう。我々の言語では、同じ1つの事物が“犬”と呼ばれたり、“動物”と呼ばれたりする。幼児が1つの事物に複数の名称が与えられうることをどうやって学んでいくのかという疑問に「制約」は十分答えていない。

さらにNelson (1988) は、制約論者の主張する語彙の獲得の過程は、現実の母子の姿とは異なることを指摘する。制約に関する諸研究では、実験者が課題を提示し、事物選択などから幼児の語意解釈の様相を検討したものがほとんどである。よって当然のことながら、日常の語意解釈時にみられるような、母子間の相互作用という側面が捨象されている。例えばNelson (1988) は、現実の母子相互作用においては大人が子どもの注目している事物を推測し、その対象に対することばを与えていると述べる。得られた結果が実験的に用意されたものに対する反応としてしか現れず、日常生活において使用されないのであれば、結果は意味を失いかねない。

ところで制約論では、子どもが語を獲得する際の典型的なパターンは、大人がただ物を指示して命名し、子どもは即座に語の意味の推定を行うことである、と仮定している (小林, 1995a)。具体的には“これはX (事物名) です”といった養育者の命名の発話によって、子どもの語意解釈が始動することが前提となっている。よってこの点では唯一、制約論者も養育者の働きかけの重要性を認めているといえよう。

実際の場面を設定し、母親の働きかけ (教授方略) を検討したのは、Callanan (1985) である。彼女は2～4歳児の母親に4枚ずつの絵を与え、指定した水準の概念名を教えるよう求めることによって、母親が絵を指差してラベリングを行う指示-命名方略を用いるのか、あるいは、“コアラは動物 (または動物の一種) です”といった包摂方略 (inclusion) を用いるのかを検討した。その結果、次のような点が明らかになった。まず、基礎概念名と上位概念名を教えるように教示した場合、1つの事物に対する指示-命名では基礎ラベルを含む発話が多く用いられ、事物のグループに対する指示-命名では、上位ラベルが多く用いられた。上位概念名を教えるときには母親の多くが基礎概念名を含む包摂文を用いたが、基礎概念名の場合にはどの母親も包摂文を用いることはなかった。上述の研究は、母子間の詳細なプロトコルデータに基づき、概念水準によって母親の用いる教授方略が異なることを明らかにした点で示唆的である。そこで本研究は、後に詳しく述べるように、日常的な母子の会話のなかで、制約論者と養育者重視の立場との唯一の接点とも言える、命名に関する発話に焦点を当て、幼児に対してどのような方略が用いられているのかを再検討を試みるものである。

本研究では、次の点に注目する。まず第一に自然な会話場面における語用論である。会話文においては省略や指示詞、同一指示が多用されることが知られている (森, 1995; Pinker, 1994)。このため前後の文脈がわからない場合、単独の発話だけ取り出せば解釈が困難な発話が続出することになる。しかし、会話の話し手と聞き手との間では、それでも十分に情報の伝達が可能である。それは、語用論的な処理がなされているからに他ならない。語用論 (pragmatics) は、理論言語学の一

分野であり、いわゆる文法ではなく、社会的な文脈における言語の使用を取り扱う比較的新しい研究分野である。語用論では、話し手が文脈を考慮して発話する機構、話し手のメッセージを聞き手が解釈する過程、それをめぐる話し手と聞き手との相互的な調整など、人間の認知能力や文化・社会的背景との関連で解明すべき問題が取り上げられる（大井、1995; 加藤、2004）。

前述のCallanan（1985）では、いわば統語論的に一定の構文をもった母親の発話を抽出し、分析の対象としている。しかしながら、日常生活のなかでの語意解釈場面を考えたとき、母親はこのような定型的な発話ばかりでなく、省略表現を用いたり、文脈のなかで特徴情報とともに事物の命名を繰り返したり、さまざまな形で教授を行っているものと考えられる。とりわけ、生活時間の多くを同じくする母子間の会話では、多くの知識や経験を共有、利用しており（西山・山崎、1995）、そのような発話が多いことが予想される。こうした発話を捨象しては、母親の用いる教授方略の実像は明らかにならない。

そこで本研究では、構文にあてはまる母親の発話を限定的に取り上げたCallanan（1985）とは対照的に、文法的な形式の厳密性よりも、むしろ文脈での語の用いられ方に着目するという語用論的な観点から母親の用いる命名方略を捉え、幼児の語意解釈場面における母親の働きかけの一端を明らかにすることを目指す。具体的にはまず、実際の語意解釈場面での母子相互作用のなかで、上位概念、基礎概念を幼児に教える場合の母親から与えられる命名を抽出し、その整理、分類を行う。その際、母親の発話に含まれるすべての命名を分析対象とし、その検討を試みるものである。これらを通して、概念水準や熟知度の違いにより、事物と名称とを結びつける機会が異なるか否かを明らかにしていく。

以上のことと関連して第二に、本研究では文脈の中での命名に注目する。針生（1991）は、Markman & Wachtel（1988）の研究方法上の問題点を克服した上で、3～5歳児を対象に相互排他性に及ぼす文脈の効果を検討している。2つの事物から1つ選んで人形に渡すという場面を設定し、新奇語の有無と既知物を提示するときの文脈の有無により4条件を設定した。例えばハブラシを用いた場合、人形が“歯磨きをする”という教示を付加した。その結果、Markman & Wachtel（1988）と同様に、新奇語と文脈がない条件では2つの事物が同程度に選ばれ、新奇語を与え文脈がない条件では未知物が多く選択された。これは相互排他性が適用されたことを示す。しかし、文脈を与えた場合、新奇語に対して既知物が多く選択され相互排他性が適用されなかった。とりわけ5歳児ではほとんどの子どもが既知物を選択した。この結果は語意解釈における文脈の重要性を強く示唆するものである。そこで本研究では一つの試みとして、文脈のなかでなされる命名に注目する。日常の会話のなかでは、いわゆる狭義の指示定義ばかりでなく、例えば、「これ、木を切る道具よ」「レンチ、家にあるよね」といった会話のなかでも指示定義をおこなっていることが予想される。そこでこれらの母親の発話を文脈に組み込まれた命名として抽出し、さらにその際、指示を伴うもの（contextualized ostension）と指示を伴わないもの（contextualized labeling）に分けて検討する。指示することが子どもにとって、必ずしも事物と名称とを結び付ける明確なやり方でないことは既に

述べた。しかしながら、もし文脈に組み込まれた命名にも母親の指示が伴うのであれば、従来捨象されてきた発話にも、幼児の語意解釈にかかわる何らかの役割をもつ可能性も出てくる。

また加えて、命名に関わる発話とともに包摂を表す発話も検討していく。包摂方略とは“An A is a B”のようにAをBの下位概念に定義づけ、一つの発話内に2つの概念水準を含む場合である(Callanan, 1985)。包摂方略は、事物と名称を結び付ける契機であるばかりでなく、カテゴリーの階層関係を含めた情報を直接的に付与するものと言える。ここでは後で詳述するように、このような一発話内に2つの概念の関係を明確に定義する明示的な包摂方略と、省略表現や同一指示などによって構文上変形しているものの、文脈から包摂関係が容易に推測可能な、暗示的な包摂方略とに分けて検討していく。

## 方 法

**被験児・者** 幼児とその母親24組。このうちすべての内容を完了した母子21組(男児11名、女児10名)を有効データとした。幼児の平均年齢 3:11(レンジ;2:2~4:9)。被験児・者は幼稚園において募集を行い、それに応じた母子であった。

**材料** 母親が教えた事物名は、子どもが熟知していない上位概念名及び基礎概念名である。使用した事物名は Callanan (1985, 1990) に準じた。ただし、これらの事物名のなかには社会的文化的な差異から、我が国の幼児には比較的よく知られているものや成人でも知らないと思われるものもみられたため、国立国語研究所(1981)の幼児・児童の連想語彙表を参考に一部修正を加えた。さらに、このようにして選出された事物名は、幼児30名(3歳児~5歳児各10名)を対象とした予備調査により熟知度(familiarity)の確認を行った<sup>1)</sup>。この結果に基づき選定された事物名リストをTable 1に示す。当該の概念水準(基礎概念、上位概念)と隣接した概念水準の熟知度(高熟知度、低熟知度)から、4条件を設定した。なおここで、隣接した概念水準とは、上位概念では基礎水準、基礎概念では上位水準を指す。例えば、子どもにとって同じく新奇な基礎概念名(e.g., ハイエナ、ミシン)であっても、熟知した上位概念(e.g., 動物)と熟知していない上位概念(e.g., 機械)では、母親の命名方略は異なることが予想される。

**手続** セッションは、母子間の会話が自然に進行するよう十分配慮し、個別に被験児・者の自宅または園内の一室にて行った。被験者である母親と幼児は並んで座り、ちょうど母親が絵本を読み聞かせながら会話をするような配置がとられた。具体的な手続きは、次のようなものであった。

(1) 練習試行: 概括的な説明の後、実験者が練習用に提示した事物名を、子どもに新しいことばを教える最もよいと思われるやり方で教えるよう求めた。必要に応じて絵カードを用いてよいこと、教える時間は母親の判断に任せることなど、練習を通して本試行での注意点を教示した。母親には、「子どもが新しいものの名前を学ぶ様子を記録していきます」と伝え、母親の自然な発話が出やすいようにした。

(2) 本試行: 母親に4つの基礎概念名と4つの上位概念名を教えるよう求めた。教える事物名はカ

**Table 1** Items Used to Teach Basic and Superordinate Concepts

Kind of Category Taught	Items	Pictures <sup>a)</sup>
Basic level categories that come from <u>familiar superordinate categories</u>	fern gourd hyena porcupine wrench axe	4 ferns 4 gourds 4 hyenas 4 porcupines 4 wrenches 4 axes
Basic level categories that come from <u>unfamiliar superordinate categories</u>	mixer sewing machine china closet buddhist altar zeppelin submarine	4 mixers 4 sewing machines 4 china closets 4 buddhist altars 4 zeppelins 4 submarines
Superordinate categories with <u>familiar basic level exemplars</u>	vehicle furniture sports equipment machine	car, bus, ship, train chair, chest, bed, desk ball, bat, tennis racket, soccer ball fan, TV, vacuum cleaner, phone
Superordinate categories with <u>unfamiliar exemplars</u>	vehicle furniture  sports equipment machine	jeep, submarine, tank, skylab china closet, buddhist altar, dresser, screen  sled, face guard, ice skates, rugby ball shaver, sewing machine, slide projector, mowing machine

Note: a) 4 pictures for each item.

ード（約8×13cm）に示し、この事物名カードと4枚の絵カード（約13×20cm、写真または線画彩色の写実的な絵）を1セットにしたものを逐次、実験者がランダムに手渡した。このようにして各事物名を8つ続けて提示し、これらの様子を音声と映像により記録した。最後に、フェイスシートへの記入を求めるとともに、本実験の目的と分析内容を説明し了解を求めた。

なお本研究では用いていないが、練習試行前に各事物名について、母親自身の熟知度及び子どもの熟知度、本試行後に再度、子どもの熟知度の評定を母親に求めている。

### 結果と考察

分析にあたっては、言語表現のすべてを文字化した。分析単位は内容においた。具体的な発話単位のカウントは、高橋（1995）を参考にして次のように行った。まず、主語など文の一部が欠落した文法上不完全な発話であっても、1つの述部をもっているものは1発話単位とした。また、子どもの発話に対する「うん」「そうそう」といった返答や名詞のみの省略された発話も1発話単位とした。ただし、言い直しや合いの手、言葉が聞き取れなかったことによる聞き直しとそれに対する返

事は独立した発話単位として扱わなかった。概念水準と隣接した水準の熟知度をもとに設定された4条件すべての試行を行い、且つ各条件で1概念名以上の試行を完了した母子21組が以下の分析対象である。

命名に関わる母親の発話をTable 2 最左欄のような分類項目により整理した。発話は2人の評定者が独立に評定し、不一致の点は協議して評定した。ランダムに選んだ10概念名分の一致率は、Cohenの  $\kappa$  で .78であった。各条件の母親の平均発話数及び標準偏差をTable 2 に示す。

**指示－命名方略 (ostension)** 母親の指示を伴う命名の発話数について、概念水準(基礎概念・上位概念)×熟知度(高熟知度・低熟知度)×命名水準<sup>2</sup>(基礎ラベル・上位ラベル)の三要因分散分析(いずれも被験者内要因)を行ったところ、「指示－命名方略」全体では、概念水準 ( $F_{(1,20)}=63.59, p<.001$ )、命名水準 ( $F_{(1,20)}=52.13, p<.001$ ) の主効果が有意であった。指示－命名において基礎ラベルを含む発話が多いという結果は、従来の知見と一致するものである (e.g., Ninio, 1980)。次に、母親の指示－命名方略の用い方をさらに詳細に検討するため、母親が指示した事物が“一つ”の場合と“グループ”の場合とに分けて分析した。なお、母親の指示－命名の様子は、映像の分析により行った。

「一つの事物」では、概念水準と命名水準の交互作用が有意であった ( $F_{(1,20)}=29.65, p<.001$ )。そこで各要因の水準別に、プールされた誤差項を用いて単純主効果を分析した結果(以下、同じ方法を使用。有意水準はすべて5%)、基礎概念では上位ラベルよりも基礎ラベルが多く、上位概念でも上位ラベルより基礎ラベルが多かった。また、命名水準が基礎ラベルでは基礎概念よりも上位概念が有意に多かった。子どもに“一つの事物”を指差して命名する場合をみると、母親は、1)基礎概念を教授するときも上位概念を教授するときも、上位ラベルよりも基礎ラベルを含む発話が多く、2)この基礎ラベルを含む発話は、基礎概念を教授するときよりも上位概念を教授するときの方が多。母親は、上位概念 (e.g., 家具) を教授するとき、子どもの事例の熟知度にかかわらず基礎概念 (e.g., いす, ベット) のそれぞれを命名していることが伺える。また、一つの事物を指示して上位ラベルを与えることはない。

「事物のグループ」でも概念水準と命名水準の交互作用が有意であった ( $F_{(1,20)}=73.86, p<.001$ )。ただし一つの事物の場合とは異なり、逆方向の交互作用を示した。そこで、各要因の水準別に単純主効果を分析した結果、基礎概念では上位ラベルよりも基礎ラベルが多く、上位概念では基礎ラベルよりも上位ラベルが有意に多かった。また、命名水準が基礎ラベルでは上位概念よりも基礎概念が多く、上位ラベルでは基礎概念よりも上位概念が有意に多かった。子どもに“事物のグループ”を指差して命名をする場合をみると、母親は、“一つの事物”の場合とは異なり、1)基礎概念を教授するときは上位ラベルよりも基礎ラベルを含む発話が多く、逆に上位概念を教授するときは上位ラベルを含む発話が多い、2)基礎ラベルを含む発話は基礎概念を教授するときに多く、上位ラベルを含む発話は、基礎概念を教授するときよりも上位概念を教授するときに多い。

以上の結果のうち、“一つの事物”に対して基礎ラベルを含む発話が多く用いられた点は、

**Table 2** Mean Number of Uses of Ostension and Labeling for Basic and Superordinate Level Categories <sup>a)</sup>

Coding categories	Basic		Superordinate	
	Familiar	Unfamiliar	Familiar	Unfamiliar
1 Ostension <sup>b)</sup>	2.06 (1.44) .07 (.16)	2.46 (1.98) .15 (.35)	3.74 (2.90) 1.98 (1.61)	5.05 (3.11) 1.83 (1.28)
Single objects	1.65 (1.47) .02 (.07)	1.98 (1.90) .07 (.23)	3.71 (2.90) .36 (.68)	5.02 (3.07) .36 (.62)
Groups of objects	.41 (.37) .05 (.15)	.48 (.52) .08 (.24)	.02 (.11) 1.57 (1.29)	.02 (.11) 1.43 (1.02)
2 Labeling	1.95 (1.12) .06 (.14)	2.03 (1.22) .11 (.25)	.88 (1.57) 3.26 (2.06)	1.05 (1.18) 2.45 (1.62)
3 Contextualized ostension	1.08 (1.32) .24 (.36)	1.02 (.82) .52 (.67)	1.71 (2.30) .57 (1.12)	1.12 (1.38) .98 (1.69)
Single objects	.77 (.95) .12 (.20)	.73 (.66) .35 (.56)	1.67 (2.15) .12 (.31)	1.20 (1.36) .76 (1.62)
Groups of objects	.31 (.47) .12 (.25)	.29 (.51) .17 (.26)	.05 (.21) .45 (.92)	.02 (.11) .21 (.36)
4 Contextualized labeling	1.13 (1.13) .54 (.57)	1.24 (1.42) .49 (.82)	1.45 (1.27) 1.98 (2.82)	.33 (.47) 2.36 (3.55)

Notes: a)  $n=21$ , ( )= $SD$

b) The uppers are basic level of name given to object, the lowers are superordinate.

Callanan (1985) と一致している。他方、“事物のグループ”では、命名水準を要因に加え詳細に検討したところ、上位概念を教授するとき上位ラベルを含む発話が多く用いられることが明らかとなった。例えば母親は、機械（上位概念）のグループを指差して「こんなのを機械っていう。」と命名することはあっても、ミキサー（基礎概念）のグループを指差して「こんなのをミキサーっていう。」と命名することはほとんどない。

**命名のみ (labeling)** 母親の指示を伴わない命名のみの発話数について、概念水準(基礎概念・上位概念)×熟知度(高熟知度・低熟知度)×命名水準(基礎ラベル・上位ラベル)の三要因分散分析(いずれも被験者内要因)を行ったところ、概念水準と命名水準 ( $F_{(1,20)}=63.86, p<.001$ )、および熟知度と命名水準 ( $F_{(1,20)}=4.53, p<.05$ ) の交互作用が有意であった。前者の交互作用について単純主効果を検討した結果、基礎概念では上位ラベルよりも基礎ラベルが多く、上位概念では基礎ラベル



よりも上位ラベルが多かった。また、命名水準が基礎ラベルでは上位概念よりも基礎概念が多く、上位ラベルでは基礎概念よりも上位概念が有意に多かった。この結果は、事物のグループに対する指示-命名の発話数のパターンと類似している。なお後者の交互作用については単純主効果を検討したところ、5%で有意な差はみられなかった。

いったん指示-命名によって事物と名称との対応づけがなされた場合、以後の会話のなかでは、命名のみでも事物と名称を対応づけることは不可能ではない。幼児は母親との相互作用のなかで、事物の名称を明確な指示-命名によって教えられるばかりではなく、命名のみの省略表現のような暗示的な方略により教授されている可能性がある。

**指示のある文脈に組み込まれた命名 (contextualized ostension)** 母親の発話数について同様に、概念水準(基礎概念・上位概念)×熟知度(高熟知度・低熟知度)×命名水準(基礎ラベル・上位ラベル)の三要因分散分析(いずれも被験者内要因)を行ったところ、「指示のある文脈に組み込まれた命名」全体では、概念水準の主効果 ( $F_{(1,20)} = 8.02, p < .05$ ) のみが有意であった。母親の文脈に組み込まれた命名のうち指示を伴うものは、基礎概念を教えるときよりも上位概念を教えるときに多いと言える。次に、さらに詳細な検討を加えるため、母親が指示した事物が“一つ”の場合と“グループ”の場合とに分けて分析した。

「一つの事物」では熟知度と命名水準の交互作用が有意であり ( $F_{(1,20)} = 4.99, p < .05$ )、単純主効果を検討した結果、熟知度が高熟知で上位ラベルよりも基礎ラベルが有意に多かった。文脈のなかに組み込まれた命名のうち、“一つの事物”への指示を伴うものについては、隣接する概念水準が熟知した事物名のとき、上位ラベルを含む発話より基礎ラベルを含む発話が多い。また、隣接する概念水準が熟知していない事物名のとき、母親は基礎ラベルを含む発話と上位ラベルを含む発話を同程度用いている。

「事物のグループ」では概念水準と命名水準の交互作用が有意であった ( $F_{(1,20)} = 11.47, p < .01$ )。単純主効果を検討した結果、上位概念では基礎ラベルよりも上位ラベルが多かった。また、命名水準が基礎ラベルでは上位概念よりも基礎概念が多く、上位ラベルでは基礎概念よりも上位概念が有意に多かった。この結果は、事物のグループに対する「指示-命名」の発話数のパターンと類似している。

「文脈に組み込まれた命名」のなかには、比較的数は少ないものの、母親の指示が確かに伴っている。さらに母親は、このような発話においても、概念水準、熟知度によって、異なる命名の与え方を行っていることが明らかとなった。

**指示のない文脈に組み込まれた命名 (contextualized labeling)** 母親の発話数について同様に、概念水準(基礎概念・上位概念)×熟知度(高熟知度・低熟知度)×命名水準(基礎ラベル・上位ラベル)の三要因分散分析(いずれも被験者内要因)を行ったところ、二次の交互作用が有意であった ( $F_{(1,20)} = 4.85, p < .05$ )。熟知度に注目して二次の交互作用を分析した結果、低熟知度においてのみ、概念水準と命名水準の交互作用が有意であった ( $F_{(1,20)} = 10.34, p < .001$ )。すなわち、隣接する概念が熟知

度の低いものの場合、上位概念で基礎ラベルより上位ラベルを含む発話が有意に多い。文脈に組み込まれた命名は、既述のように「家で使うのが家具よ」など事例の特徴情報とともに命名する発話が大半である。母親は、熟知度の低い基礎事例を用いて上位概念を教えるときには、基礎事例へのラベリングをほとんどせず、上位ラベルを含む発話を多く発することが伺える。

**包摂方略 (inclusion)** 包摂関係を表す母親の発話をTable 3 最左欄のような分類項目により抽出、整理した。発話は2人の評定者が独立に評定し、不一致な点は協議して評定した。ランダムに選んだ10概念名分の一致率は、Cohenの  $\kappa$  で.81であった。各分類項目の母親の平均発話数をTable 3に示した。母親の明示的包摂 (explicit inclusion) に関する発話数について、概念水準(基礎概念・上位概念)×熟知度(高熟知度・低熟知度)の二要因分散分析 (いずれも被験者内要因) を行ったところ、概念水準の主効果が有意傾向にあった ( $F_{(1,20)}=3.53, p<.10$ )。母親は、上位概念を教えるときに基礎概念を含む包摂文を用い、基礎概念を教えるときには包摂文をほとんど用いないという結果は、分析方法は異なるもののCallanan (1985) の結果と一致するものである。

次に、暗示的包摂方略 (implicit inclusion) のうち「指示詞 (demonstrative)」とは、“指示詞(A) is a B” のような表現のうち、文脈から指示詞の指す事物が明らかな場合である (e.g., 「それ (ベット) は家具」「これ (シダ) は植物の仲間よ」)。つまり、指示詞の指す事物があらかじめ、母子のやりとりのなかで示されていることを条件に抽出を行った。同様に、概念水準(基礎概念・上位概念)×熟知度(高熟知度・低熟知度)の二要因分散分析を行ったところ、概念水準の主効果が有意であった ( $F_{(1,20)}=5.66, p<.05$ )。なお、この方略に含めた発話は、構文としては同じ、上位ラベルを含む「指示-命名」あるいは「命名のみ」の発話の一部である。従来、単に上位ラベルを含む命名と捉えられていたもののうち一部は、暗に包摂関係を示す発話であり、また、あらかじめ基礎概念を命名した上で、上位ラベルを与えるという順序性が示唆されたといえよう。

「集合 (collective)」は、“集合 ( $A_1, A_2 \dots$ ) is a B” のような表現のうち、文脈から集合表現が指す事物が明らかな場合である<sup>3</sup> (e.g., 「これゼーンぶ、乗物」「全部ね、こういう種類を機械って」)。

**Table 3** Mean Number of Uses of Inclusion for Basic and Superordinate Level Categories <sup>a)</sup>

Coding categories	Basic		Superordinate	
	Familiar	Unfamiliar	Familiar	Unfamiliar
1 Explicit Inclusion	.13 (.22)	.05 (.15)	.31 (.62)	.19 (.36)
2 Implicit Inclusion				
Demonstrative	.12 (.34)	.01 (.05)	.45 (.80)	.29 (.89)
Collective	.19 (.66)	.02 (.11)	2.12 (1.10)	1.91 (1.38)

Note: a)  $n=21, ( )=SD$

同様に、概念水準(基礎概念・上位概念)×熟知度(高熟知度・低熟知度)の二要因分散分析を行ったところ、概念水準の主効果が有意であった ( $F_{(1,20)} = 97.15, p < .001$ )。この結果は、上述の2つの包摂方略と同じく、熟知度にかかわらず上位概念の教授時に発話数が多いことを示している。

以上、語用論的な観点から母親の用いる包摂方略を検討したが、従来の明示的な包摂方略に加えて、指示詞や集合的な表現を用いた暗示的な包摂方略も用いられ、教授する概念水準によって異なる与え方がなされていることが明らかとなった。日常的な母子相互作用のなかでこのような方略が、子どものカテゴリー化に何らかの役割を果たしている可能性が示唆された。

### 総合的考察

本研究では、Callanan (1985)における発話の抽出方法上の問題点を克服したうえで、母親の教授方略を再検討することを第1の目的とした。具体的には、語意解釈場面において母親が発したすべての命名に関わる発話を語用論的な観点から整理、分類し、従来捨象されていた発話を含めた分析を試みた。その結果、幼児は母親との相互作用のなかで、事物の名称を明確な指示-命名によって教えられるばかりではなく、命名のみの省略表現や文脈に組み込まれた命名のような暗示的な方略により教授されている。このような母親の働きかけによって、日常生活における幼児の語意解釈が促されている可能性が示唆された。

結果を全体的にみると、母親は、単に“これはXです”といった定型的な指示-命名を行うばかりでなく、特徴情報などのさまざまなカテゴリー情報とともに文脈に組み込んだ形で命名している。その1つの証拠に、母親はそのような発話の一部に指示を伴っていることが確認された。幼児は、文脈のなかで発せられる母親の命名によって、事物と名称とを結びつけるよう方向づけられていることが示唆された。一方、包摂に関する母親の発話を検討したところ、隣接する水準の熟知度にかかわらず、どの方略とも上位概念を教授するときによく発せられることが示された。暗示的な包摂方略として取り上げた2つの方略とも、明示的包摂方略と非常に類似したパターンを示したことから、省略表現のなかにもカテゴリー関係に関わる情報が組み込まれていることが示唆されたと言えよう。今後、文脈に組み込まれた命名や省略された暗示的な包摂方略を幼児の語意解釈に何らかの役割を果たすものとして扱う意義は十分にあると考えられる。

ところで、幼児の語意解釈研究の1つの関心事は、相互排他性の克服であることは既に述べた。子どものこのような原理の克服を可能にする大人の命名方略とは、具体的に、1つの事物に複数の名称を用いるといったものであろう(針生, 1996)。本研究で取り上げてきた母親による語意教授場面は、まさに子どものこのような場面との出会いが、子どもの語意解釈に及ぼす役割を検討しようとするものであった。

母子間の会話は日々繰り返される累積的な営みであり、日常生活の中で母親からの入力情報と相互排他的な解釈との葛藤を繰り返し経験することは、長期的には、子どもの語意解釈の変化につながっていくと考えられる。そのような変化を促す要因として、本研究の結果から、概念水準によ

て異なるいくつかの母親の命名方略や包摂方略が、子どもの相互排他性の克服や階層構造の理解を促している可能性が十分考えられる。

最後に今後の課題として、発達初期の子どもがどうしてもスピードで語意を学習していくことができるのかを真に説明しようとするなら、針生（1996）も指摘するように、他者との相互作用の重要性を漠然と説くだけでは不十分である。母親のどういう要因によって、どのように子どもの語意解釈が規定されてくるのか、あるいは逆に、子どもの要因によって母親の働きかけはどのような影響をうけ、変化していくのかといった相互作用的なプロセスを詳細に明らかにしていく必要がある。また、子どもの語意解釈と母親の教授方略との関係を解明していくには、結局は語彙獲得の制約の実像をいっそう明らかにし、両者を別個に検討するのではなく総合的、統合的に捉えていくことでしかあり得ないであろう。Baldwin（1991, 1993）やTomasello（1997）の一連の研究以来、語彙獲得の関心の一つは、他者の意図を理解するといった社会認知的要因が、如何に子どもの語意学習に貢献しているか明らかにすることに傾斜している。大嶋（2003）がモデルに示すように、生得的制約、社会認知的システム、学習システム、インプット(入力)をメタ的に検討していくことが今後の重要な課題の一つと考えられる。

#### 引用文献

- Baldwin, D. A. 1991 Infants' contribution to the achievement of joint reference, *Child Development*, 62, 875-890.
- Baldwin, D. A. 1993 Early referential understanding: young children's ability to recognize referential acts for what they are, *Developmental Psychology*, 29, 1-12.
- Brown, A. L., & DeLoache, J. B. 1978 Skills, plans and self-regulation. In R.Siegler(Ed.), *Children's thinking: What develops?* Erlbaum.
- Callanan, M. A. 1985 How parents label objects for young children: The role of input in the acquisition of category hierarchies. *Child Development*, 56, 508-523.
- Callanan, M. A. 1990 Parents' descriptions of objects: Potential data for children's inferences about category principles. *Cognitive Development*, 5, 101-122.
- Carey, S. 1978 The child as word learner. In M. Halle, J. Bresnan & G. A. Miller(Eds.), *Linguistic theory and psychological reality*. Cambridge, MA:MIT Press.
- 針生悦子 1991 幼児における事物名解釈方略の発達の検討—相互排他性と文脈の利用をめぐる— 教育心理学研究, 39, 11-20.
- 針生悦子 1996 幼児期における事物名解釈方略の変化—相互排他性制約をめぐる— 風間書房
- 加藤重広 2004 日本語語用論のしくみ 研究社
- 小林春美 1995a 言語獲得 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩 1995年版, 金子書房, Pp.91-113.
- 小林春美 1995b 語彙の獲得 大津由紀雄(編) 認知心理学 3 言語 東京大学出版会, Pp.65-79.

- 国立国語研究所 1981 幼児・児童の連想語彙集 東京：東京書籍
- Markman, E. M. 1989 *Categorization and naming in children* Cambridge, MA :MIT Press.
- Markman, E., & Wachtel, G. 1988 Children's use of mutual exclusivity to constrain the meaning of words. *Cognitive Psychology*, 20, 121-157.
- 森 敏昭 1995 文章の理解 森 敏昭・井上 毅・松井孝雄(共著) グラフィック認知心理学 サイエンス社 Pp.145-166.
- Nelson, K. 1988 Constraints on word learning? *Cognitive Development*, 3, 221-246.
- Ninio, A. 1980 Ostensive definition in vocabulary teaching. *Journal of Child Language*, 7, 565-573.
- 西山 修・山崎 晃 1995 幼児の概念獲得場面における母親からのカテゴリー情報の検討—既知知識との関連づけを中心に— 広島大学教育学部紀要第一部(心理学), 44, 175-184.
- 大井 学 1995 言語発達の障害への語用論的接近 風間書房
- 大嶋百合子 2003 言語獲得に何が必要か? 人工知能学会誌, 18, 41-48.
- Pinker, S. 1994 *The Language Instinct -How the Mind Creates Language-* 椋田直子(訳) 1995 言語を生み出す本能(上) NHKブックス
- 高橋 登 1995 幼児期における母子間の情報伝達の特徴について—幼児の発話を促す聞き手の発話の特徴— 教育心理学研究, 43, 32-41.
- Tomasello, M. 1997a The pragmatics of word learning. *認知科学*, 4, 59-74.

## 注

- 1 本実験で使用したのと同じ図版を用い命名テストを個別に実施した。また、図版に描かれた事物について知っていることを自由に話してもらい、熟知度を確認するための補助的な資料とした。
- 2 Callanan (1985) を参考に、母親が事物を命名するとき、基礎ラベルを与えるか (e.g., これはベッド)、上位ラベルを与えるか (e.g., こんなのを家具っていう) を一つの独立変数とみなし、命名の概念水準(本文では「命名水準」と略記) を一つの要因とした。
- 3 Callanan (1985) では、集合的な言い方 (collective statements) として言及されているものの分析の対象とはなっていない。

## 付 記

本論文を作成するにあたり、広島大学教授山崎晃先生、愛媛大学教授深田昭三先生のご指導を賜りました。記して感謝の意を表します。また実験にご協力頂きました、川上西部保育所、広大附属幼稚園、広大附属三原幼稚園の子ども達、お母様方、先生方に厚く御礼申し上げます。

2005年10月31日受付  
2005年12月25日受理